

ヴェルディの歌曲と室内声楽作品

水谷 彰良

初出は『ヴェルディアーナ』第24号紀要号（日本ヴェルディ協会、2009年11月発行）の拙稿「ヴェルディの歌曲と室内声楽曲」（原本は同年1月17日に東京文化会館中会議室で筆者が行った日本ヴェルディ協会講演の配布資料）。ロッシーニの歌曲と室内声楽作品を考える上で参考資料になると考え、ディスクを追補するなど一部改訂してHPに掲載します。なお、『ロッシニアーナ』に掲載済みのロッシーニの歌曲に関する論考は、後日HPに掲載させていただきます。（2013年2月28日。作品目録の増補改訂版は3月16日に再掲載）

近代イタリア歌曲の特色とヴェルディ

ヴェルディに先立つロッシーニ、ベッリーニ、ドニゼッティの歌曲・室内声楽作品は、その優れた音楽性によって、同時代の「民衆歌謡」と「芸術歌曲」の質的な差異を決定づけている。オペラ作曲家である彼らは当時の名歌手の技巧や歌の表現力を前提に、ブルジョアや王侯貴族のサロン用に歌曲や室内声楽作品を作曲し、それらは楽譜出版を通じて国際的に広く流布するとともに、19世紀イタリア歌曲の基本的性格や特殊性を明確にしたのだった（民族的素材を重視して旋律より詩を重んじるリートとの差異も、この段階で決定的となる）。

19世紀初めのイタリアでは、最も優れたオペラ作曲家が同時に最も優れた歌曲作曲家であった。なぜならイタリアではオペラが最高の芸術と見なされ、オペラ作曲家として大成できなかった者は教会音楽家として生きたため、必然的に世俗音楽と疎遠にならざるを得なかったからである。そしてロッシーニの収めた大きな成功は、オペラの作曲だけで富を得られる時代を到来させ、イタリア人作曲家のオペラ以外の分野への関心が急速に薄れていった。こうした流れはヴェルディ、さらにはオペラ以外のジャンルをほとんど省みなかったプッチーニで決定的となる。

オペラ以外のジャンルへの関心の有無が、ジュゼッペ・ヴェルディとそれ以前のイタリア人作曲家との本質的相違である。それゆえヴェルディの室内声楽作品は約30曲と数が少ないだけでなく、評価の点でも必ずしも高くない。歌曲集はオペラ・デビュー前に出版した《六つのロマンツァ（*Sei Romanze*）》（1838年ミラーノのカンティ Canti 社刊）、オペラ作曲家としての評価の高まった1845年に出版社の依頼で作曲した《六つのロマンツァのアルバム（*Album di sei Romanze*）》（1845年ミラーノのルッカ Lucca 社刊）があり、それぞれ秀作を含むものの、この分野に新風を吹き込むものではなく、後世への影響は無きに等しかった。これはヴェルディが1830年代のパリに誕生した近代サロンにふれる機会を持たず、サロン用の楽曲に無関心であったことも関係するようだ（彼は社交的な人間関係を軽蔑していたふしがある）。

プッチーニまでの著名なイタリア人作曲家はみなオペラの分野で活躍し、室内声楽作品はサロン音楽の域を出ることがなかった。だからといって、19世紀前半期のイタリア歌曲に対する不当に低い評価を鵜呑みにするわけにはいかない。そうした評価は同時代のリート（ドイツ・リート）を基準に、その概念でイタリア歌曲を捉えているからだ。「詩と音楽の融合」や「ロマンティズム」の観点では、確かにそう思われて仕方のない部分もある。だが、イタリア人作曲家の室内声楽曲の中にも豊かな音楽性を具え、高い完成度をもつ作品がないわけではない。不幸なのは、イタリア歌曲をリートより低く見る考え方が19世紀に流布し、またゲーテやハイネなどに比して同時代のイタリア詩人の知名度が低く、イタリア以外の地域で評価の対象とされなかったことである。

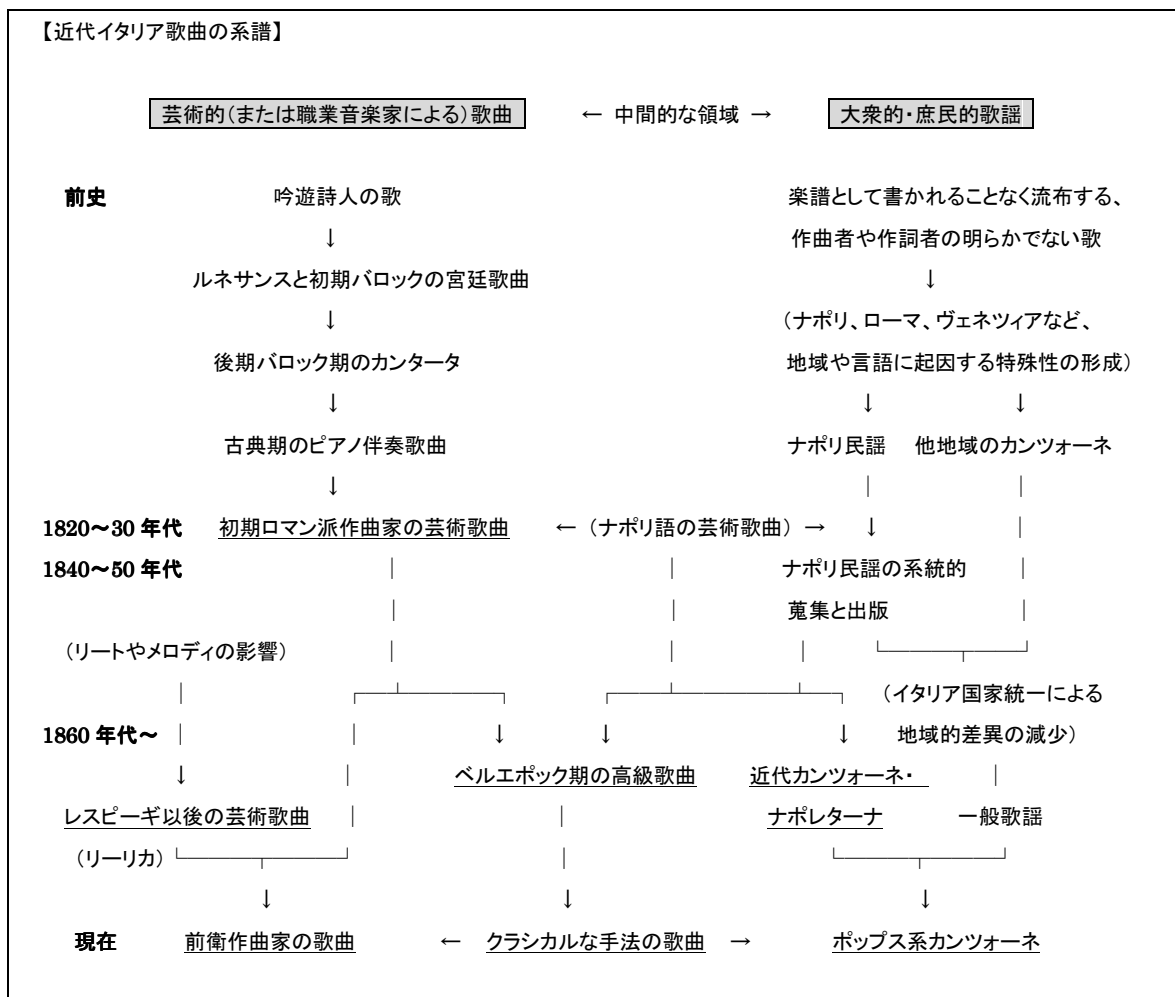
そもそも近代リートの観点で他の国々の歌曲を判断することに、どれほどの意味があるのだろうか。ゲーテの求める「音楽は詩のしもべ」がリートの基本理念であるとしても、「詩は音楽のしもべ」（モーツァルト）、「はじめに音楽、次に言葉」（サリエリの歌劇の題名）もまた、歌の本質に根ざしたあり方だからである。19世紀半ばまでのイタリア人作曲家は、初期バロックの作曲家を除いてテキストよりも歌と歌唱を第一に考え、音楽に乗せた詩の享受ではなくベルカントの声と歌唱技術を重視した。それゆえ、リートにおいて伴奏ピアノが雄弁に参与するのに対し、イタリア歌曲では歌唱旋律に最大の関心を置き、ピアノは旋律を浮き立たせ、これを支える役割を果たしたのである。

イタリア歌曲史における芸術的な歌曲と大衆的歌謡の系譜

イタリア歌曲もまた固有の歴史を持つ。「芸術性の高い」「職業作曲家によって作られ、印刷楽譜によって流布する作品」の系譜とは別に、民謡として歌い継がれる庶民的歌謡の歩みがあり、それらは個別に発展を遂げてきたが、19世紀初頭を起点に両者に接点生まれ、近現代のイタリア歌曲の種々の流れを生み出していく。その始まりは1820年代に求められる。土着的なナポリ歌謡が印刷楽譜によって流布し始め、それらがナポリで活動する有名オペラ作曲家の平易な歌曲と共に家庭音楽用のアルバムとしてナポリで出版され始めたのが、この時期だったからである¹⁾。

近代イタリア歌曲と呼ぶべき作品群も1820年代に現れ始めていたが、その刷新と近代化の発端は七月王政期のパリにおけるロッシーニのサロン活動に求められる²⁾。歌曲・重唱曲集《音楽の夜会 (*Les Soirées musicales*)》(パリ、1835年)がその出発点であり、その影響下にドニゼッティ《ボジッリポの夏の夜 (*Nuits d'été à Pausilippe*)》(ナポリ、1836年)、メルカダンテ《イタリアの夜会 (*Soirées italiennes*)》(パリ、1836年)が作られ、それらはイタリアでも出版されて広く流布したのである。ロッシーニは1836年にパリを去った後、ミラーノで同じタイプのサロンを開き(1837年11月初旬~翌38年1月半ば)、パリと同質のサロン文化をイタリアに導入する発端となった。ヴェルディ最初の歌曲集《六つのロマンス》の出版(ミラーノ、1838年)も、こうした流れに沿うものといえる。一連の初期ロマン派イタリア歌曲にはシューベルトの影響が絶無で、リートやメロディ(フランス近代歌曲)の影響を受けたイタリア芸術歌曲(リーリカ *lirica*)の誕生をみるのは、レスピーギの登場する19世紀末であった。

前史から現在に至るイタリア歌曲の歩みをまとめると、次のようになる(註:これは筆者独自の史的理解に基づく変遷であり、イタリア歌曲研究者の共通理解でないことをお断りしておく)。



次に、ヴェルディの歌曲・室内声楽作品を、コメント付きで目録化しておきたい。

ヴェルディ 歌曲／室内声楽曲目録 (水谷彰良・編 増補改訂版)

ヴェルディの歌曲に関する研究は遅れており、完全な目録が作成されているとはいいがたく、文献間に異同や矛盾も散見される。ここでは全 30 曲を時代順に目録化し、《アヴェ・マリア》を別ジャンルとして末尾に付記した(括弧内の人名はテキストの作者。通番号は編者が便宜的に付した)。ヴェルディの歌曲もエディション上の問題を抱えているはずであるが現時点で詳らかでなく、シカゴ大学編ヴェルディ全集の該当巻 (Series II) の出版を待ちたい。

2013 年 3 月 16 日 増補改訂版の追記

最初に発表した目録 (2009 年版) では、グローヴ音楽・音楽家事典のヴェルディ作品目録「歌曲・重唱曲」の冒頭に掲げられた「乾杯 Brindisi (1835 年?) (アンドレア・マッフェーイ Andrea Maffei)」を通番号 1 として採用したが、これを《六つのロマンツァ》(1845 年) 第 6 曲《乾杯》の第 1 稿とするには年代が違いすぎるため、この増補改訂版では 1845 年の作曲と推定して通番号 15 に移動した。それゆえ新たな通番号 1 は 1838 年の《六つのロマンツァ》第 1 曲となる。

★歌曲集《六つのロマンツァ Sei romanze》(1838 年。全 6 曲)

- 1) 第 1 曲 墓に近づかないでほしい Non t'accostare all'urna (ヤコポ・ヴィットレツリ Jacopo Vittorelli)
- 2) 第 2 曲 エリーザよ、疲れた詩人は死んでいく More, Elisa, lo stanco poeta (トンマーゾ・ピアンキ Tommaso Bianchi)
- 3) 第 3 曲 孤独な部屋で In solitaria stanza (ヤコポ・ヴィットレツリ Jacopo Vittorelli)
- 4) 第 4 曲 暗い夜を恐れて Nell'orror di notte oscura (カルロ・アンジョリーニ Carlo Angiolini)
- 5) 第 5 曲 わたしは安らぎを失い Perduta ho la pace (ゲーテ『ファウスト』からのルイーダ・バレストラ Luigi Balestra による翻訳)
- 6) 第 6 曲 ああ、悲しみの聖母様 Deh, pietoso, o addolorata (ゲーテ『ファウスト』からのルイーダ・バレストラ Luigi Balestra による翻訳)

注記：ヴェルディがオペラ作曲家デビュー前に作曲し、ミラーノのカンティ社 (Giovanni Canti) から出版された歌曲集 (出版番号 387、プレート番号 381-386。ピエトロ・ファヴァグロッサ伯爵 conte Pietro Favagrossa に献呈出版)。自筆楽譜はリコルディ社文書館に所蔵され、第 1 曲の声乐パートに「Canto」、伴奏パートに「Piano-Forte」とある。全 6 曲は第 3 曲を除いてすべて短調という点が同時代のイタリア歌曲集との歴然たる違いで、真摯な音楽傾向がヴェルディの本質的要素であると判る。シューベルトの影響があるとは考えにくい、ドイツ・リートをなんらかの形で知っていた可能性は否定できない。最後の 2 曲がゲーテ『ファウスト』の翻訳をテキストに用いた点も、そうした推測の一助となるだろう。とりわけ第 6 曲は曲中のテンポや長調への変移 (転調)、いちおう通作的な形式であることも同時代のイタリア歌曲との違いを浮き彫りにする。この第 1 集はロッシニ、ペッリーニ、ドニゼッティ、メルカダントの歌曲集とは別種の発想やコンセプトの下に作られているが、個人的には第 2 曲の音楽にロッシニ《音楽の夜会》の影響を感じる。

7) 月のなんと白いこと(3 声、フルートとピアノフォルテのための夜想曲)

Guarda che bianca luna., Notturmo a tre voci con flauto e pianoforte (1839 年) (ヤコポ・ヴィットレツリ Jacopo Vittorelli)

注記：自筆楽譜 (ミラーノのスカラ座博物館所蔵) の日付は 1839 年 2 月 26 日。編成はソプラノ、テノール、バス、フルートとピアノ。同年ミラーノのカンティ社から歌手のチェーザレ・サンジョルジ Cesare Sangiorgi に献呈出版された (プレート番号 392)。この作品は同年 4 月 13 日付『Gazzatta Privilegiata di Milano』で賞賛されている。

8) 亡命者 L'esule (1839 年) (テミストクレ・ソレーラ Temistocle Solera) romanza per canto e pianoforte

注記：1839 年にミラーノのカンティ社から出版されたロマンツァ (プレート番号 393)。音楽愛好家エジミーオ・ミノージャ Esimio Minoja に献呈出版 (次の《誘惑》とセットで出版)。自筆楽譜はリコルディ社文書館の所蔵で、声乐パートに「Canto」、伴奏パートに「Piano forte」とある。オペラ・アリア風の起伏に富む大曲 (インチピト：Vedi! la bianca luna)。

9) 誘惑 La seduzione (1839 年) (ルイーダ・バレストラ Luigi Balestra) romanza per canto e pianoforte

注記：前曲《亡命者》とセットで 1839 年にミラーノのカンティ社から出版されたロマンツァで、献呈先は前曲と同じミノージャ (プレート番号 394。インチピト：Era bella com' angiol del cielo)。自筆楽譜はリコルディ社文書館所蔵。

10) 思い出に引かれて Chi i bei dì m'adduce ancora (1842 年) (ゲーテの詩 Erster Verlust のルイーダ・バレストラ Luigi Balestra による翻訳と推測) romanza per canto e pianoforte

注記：マリニャーノ・ソフィア・デ・メディチ伯爵夫人 contessa di Marignano Sofia de' Medici のアルバムに楽譜を手書きしたロマンツァ。生前未出版で 1948 年の『The Music Review』に初掲載された。自筆楽譜の所在は不明だが、日付は 1842 年 5 月 6 日ミラーノとされる。

- 11) 物言わぬ墓は暗く Cupo è il sepolcro e mutolo (1843年) (不詳) romanza per canto e pianoforte

注記:生前未出版で自筆楽譜(ミラーノのスカラ座博物館所蔵)の複製が2000年に出版(Milan & Parma: Museo Teatrale alla Scala & Istituto Nazionale di Studi Verdiani,2000.)。日付は1843年7月7日ミラーノ。ルドヴィーコ・ベルジョイオーゾ伯爵 conte Ludovico Belgioioso に献呈。

- 12) 人生は苦悩の海 È la vita un mar d'affanni (1844年) (おそらくフランチェスコ・マリーア・ピアーヴェ Francesco Maria Piave) romanza per canto e pianoforte

注記:生前未出版で1951年に世に出た小品。台本作家ヤーコポ・フェッレットティの娘キアラ・フェッレットティ Chiara Ferretti に献呈され、日付は1844年11月5日ローマ。自筆楽譜は個人蔵。

- 13) Era bella, ancor più bella (1844年)

注記:生前未出版。自筆楽譜は1974年のオークションにかけられ個人蔵。日付は前曲と同じ1844年11月5日ローマ。伴奏パートに「Cembalo」の記載があるという。

- 14) 日没 Il tramonto (第1稿 1845年) (アンドレア・マッフェーイ Andrea Maffei)

注記:次に掲げる《六つのロマンツァのアルバム》第1曲の初稿と思われる自筆楽譜(ニューヨークのP.モーガン図書館所蔵)。調性と伴奏音型が異なり、旋律にもさまざまな違いがある(インチピト: Amo l'ora del giorno che muore)。日付は1845年6月1日ミラーノ。

- 15) 乾杯 Brindisi (第1稿 1845年) (アンドレア・マッフェーイ Andrea Maffei)

注記:次に掲げる《六つのロマンツァのアルバム》第6曲の初稿に当たる自筆楽譜。第2稿とは別ヴァージョンとして歌われる(インチピト: Mescetemi il vino!)。最初に記したようにグローヴ事典はこれを「1835年?」としたが、ここでは《日没》第1稿と同じ1845年と推定したい。同事典によれば自筆楽譜はリコルディ社文書館の所蔵で、1935年のリコルディ版が初版となる(G.Verdi: Composizioni da camera.,Milano,1935.所収)。

★歌曲集《六つのロマンツァ Sei Romanze》(1845年)

- 16) 第1曲 日没 Il tramonto (アンドレア・マッフェーイ Andrea Maffei) (インチピト: Amo l'ora del giorno che muore) [第2稿]

- 17) 第2曲 ジプシー女 La zingara (マンフレード・マジジョーニ Manfredo Maggioni) (インチピト: Chi padre mi fosse, qual patria mi sia)

- 18) 第3曲 星に Ad una stella (アンドレア・マッフェーイ Andrea Maffei) (インチピト: Bell'astro della terra)

- 19) 第4曲 煙突掃除屋 Lo spazzacamino (マンフレード・マジジョーニ Manfredo Maggioni 註:フェリーチェ・ロマーニ Felice Romani とする文献もある) (インチピト: Son d'aspetto brutto e nero)

- 20) 第5曲 神秘 Il mistero (フェリーチェ・ロマーニ Felice Romani) (インチピト: Se tranquillo a te daccanto)

- 21) 第6曲 乾杯 Brindisi (アンドレア・マッフェーイ Andrea Maffei) (インチピト: Mescetemi il vino!) [第2稿]

注記:ヴェルディ2番目の歌曲集(全6曲)。ミラーノのルッカ社(Francesco Lucca)の執拗な求めにより、しぶしぶ作曲した(プレート番号5654-5659。出版社からドン・ジュゼッペ・デ・サラマンカ Don Giuseppe de Salamanca に献呈出版)。自筆楽譜はリコルディ社文書館の所蔵。自筆楽譜の第1曲の声乐パートに「Canto」、伴奏パートに「Cembalo」と記されている。なお、第1曲と第6曲に異稿(前記N.14と15)が現存することから、[第2稿]と付記した。

- 22) 哀れな男[物乞い] Il poveretto (1847年) (マンフレード・マジジョーニ Manfredo Maggioni) romanza per canto e pianoforte

注記:1847年にミラーノのルッカ社から出版されたロマンツァ(インチピト: Passager, che al dolce aspetto)。自筆楽譜は所在不明(おそらく消失)。

- 23) 捨てられた女 L'Abandonée (1849年) (M.L.E [エスキュディエ兄弟の略号]) Andante-Étude per soprano e piano-forte

注記:ヴェルディ唯一のフランス語歌曲。1849年に作曲され、ストレッポーニに献呈。作詞者イニシャル[M.L.E]のみで、楽譜出版社主エスキュディエ兄弟(Marie et Léon Escudier)と推測される。パリの音楽新聞『La France Musicale』1849年1月号に掲載(インチピト: Beaux jours que le cœur envie)。自筆楽譜は所在不明。

- 24) 咲いたばかりの可愛い花は Fiorellin che sorge appena [舟歌 Barcarola] (1850年) (フランチェスコ・マリーア・ピアーヴェ Francesco Maria Piave) romanza per canto e pianoforte

注記:《第一次十字軍のロンバルディア人》アルヴィーノを創唱したテノール、ジョヴァンニ・セヴェーリ Giovanni Severi に献呈したロマンツァ。生前未出版で、自筆楽譜(個人蔵)の日付は1850年11月19日トリエステ。ファクシミリが Gino Stefani: *Verdi e Trieste*, Trieste, 1951 に掲載。

25) 花売り娘 Fiorara (1853 年) (不詳[ブーヴォリ Buvoli?]) romanza per canto e pianoforte

注記：生前未出版。楽譜はアントーニオ・バレッツィ Antonio Barezzi のアルバムに書かれ、日付が 1853 年 10 月 23 日パリと記されているという（自筆楽譜は所在不明）。作詞者をヴェネツィア方言詩人ブーヴォリと推測する研究者もいる（インチピト：Voleu che quei do ocieti）。

26) 除きたまえ、ああ優しき人よ Sgombra, o gentil, dall'ansia (1858 年) (アレッサンドロ・マンゾーニ Alessandro Manzoni) balata per canto e pianoforte

注記：生前未出版で 1980 年代に存在を知られたバッラータ。友人メルキオッレ・デルフィーコ Melchiorre Delfico に贈った短い曲で、自筆楽譜（個人蔵）の日付は 1858 年 4 月 20 日ナポリ。マンゾーニの詩による唯一のヴェルディ歌曲でもある（マンゾーニ『アデルキ (Adelchi)』IV,1223-28）。真摯な祈りの歌。

27) 詩人の祈り La preghiera del poeta (1858 年) (ニコラ・ソーレ Nicola Sole) romanza per canto e pianoforte

注記：生前未出版の短いロマンツァ。『Rivista Musicale Italiana』（1941 年）に掲載され、自筆楽譜は個人蔵。作曲の経緯は不明（インチピト：Del tuo celeste foco, eterno iddio）。

28) 徽章 Il brigidino (1862 年) (フランチェスコ・ダッロンガロ Francesco Dall'Ongaro) romanza per canto e pianoforte

注記：友人の政治家ジュゼッペ・ピローリ Giuseppe Piroli の求めにより、パルマのレージョ劇場に出演するソプラノ、イザベッラ・ガッレットティ・ジャンノーリ Isabella Galetti Gianoli のために作曲されたと推測されるロマンツァ。自筆楽譜は個人蔵。ピローリのアルバムに書かれ、日付は 1862 年 5 月 24 日トリノ。生前未出版でファクシミリは 1941 年の『Scenario』誌に掲載。1 分に満たぬ小曲で、曲調は次の《ストルネッコ》と似ている（インチピト：E lo mio damo se n'è ito a Siena）。

29) ストルネッコ Stornello (1869 年) (不詳) romanza per canto e pianoforte

注記：困窮した詩人・台本作家フランチェスコ・マリーア・ピアヴェの経済援助を目的とした曲集に寄せた洒落たロマンツァ。1869 年にリコルディ社から出版（Album per Canto di Auber-Cagnoni-mercadante-Ricci-Thomas-Verdi a beneficio del poeta F.M.Piave., Ricordi,Milano,1869.）。作詞者不詳だが、ヴェルディ自身によると推測する研究者もいる（インチピト：Tu dici che non m'ami anch'io non t'amo）。自筆楽譜は所在不明（おそらく消失）。

30) 主よ、哀れみたまえ Pietà Signor (1894 年) (ヴェルディとボーイト Verdi / Boito)

注記：1894 年 11 月 16 日にシチーリアとカラブリアを襲った地震の犠牲者のために作曲を思い立ち、自分でテキストを選んで旋律を考え、その音節に即した詩句の完成をアッリーゴ・ボーイトに依頼した（ボーイト宛の手紙、1894 年 12 月 3 日付）。自筆楽譜の日付は 1894 年 12 月 6 日 [ジェノヴァ]。初版は『Fata Morgana』（1894 年）に掲載。宗教的テキストとして宗教曲に分類されることもあるが、人間的で普遍的な心情から生まれた歌詞でもあり、歌曲と位置づけても間違いではあるまい。

ヴェルディの詩句：Pietà Signor della miseria mia! / Ci salva tu...e ria!

ボーイト完成の詩句：Pietà Signor del nostro error profondo / Tu solo puoi levare il mal dal mondo.

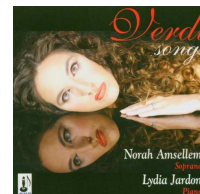
付記：《アヴェ・マリア》について

アヴェ・マリア Ave Maria [volgarizzata da Dante] (1880 年) (不詳) per soprano e archi

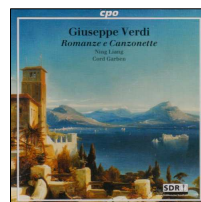
注記：1880 年に作曲され、同年 4 月 18 日ミラーノのスカラ座で初演された（初演歌手：Teresina Singer）。自筆楽譜はリコルディ社文書館の所蔵。伴奏は弦楽 5 部で、ハルモニウムまたはピアノ伴奏用の楽譜も出版されたため歌曲と誤解されているが、「その他の声楽曲」に分類すべき楽曲。なお、イタリア語のテキストはかつてダンテによると信じられたが、実際は 14 世紀の不詳の詩人による（インチピト：Ave regina, vergine Maria, piena di grazia）。

◎主なディスク（選集。曲数の多い順に掲げる）

- ・ヴェルディ歌曲全集 Verdi Complete Songs (全 25 曲) 1989 年録音
演奏：レナータ・スコット (S) パオロ・ワシントン (B) ヴィンチェンツォ・スカレーラ (pf) Nuova Era 231725
- ・ヴェルディ歌曲集 Verdi Songs (全 18 曲) 2004 年録音 演奏：ノラ・アンセレム (S) リディア・ジャルドン (pf) AR Ré-sé AR2004 8

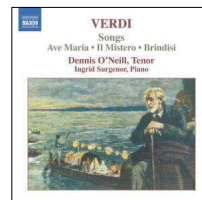


- ・ヴェルディ歌曲集 *Verdi Canzoni* (全 17 曲) 2005・2010 年録音
演奏：ディアナ・ダムラウ (S) セザール・アウグスト・グティエレス (T)
パウル・アルミン・エーデルマン (Br) フリードリヒ・ハイダー (Pf) Telos
Records TLS1005



- ・ヴェルディ：ロマンツァとカンツォネッタ集 *Verdi Romanze e Canzonette*
(全 17 曲) 1996 年録音 演奏：ニン・リャン (Ms) コード・ガーベン (pf)
CPO 999 425-2

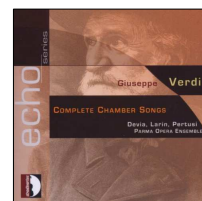
- ・ヴェルディ歌曲集 *Verdi Songs* (全 16 曲) 1997 年録音 演奏：デニス・オ
ニール (T) イングリッド・サージェナー (pf) Naxos 8.557778



- ・ヴェルディ歌曲集 *Verdi Songs for Voice and Piano* (全 15 曲《オテッロ》の
「アヴェ・マリア」含む) 1986 年録音 演奏：マーガレット・プライス (S)
ジェフリー・パーソンズ (pf) Eloquence Australia 4805368

(以下、特殊な編曲)

- ・木管楽器伴奏編曲のヴェルディ室内声楽曲全集 *Verdi Complete Chamber
songs* (全 28 曲) 1998 年録音 演奏：マリエッタ・デヴィーア (S) セル
ゲイ・ラーリン (T) ミケーレ・ペルトウージ (B) パルマ・オペラ・アン
サンブル Stradivarius STR 11017 (収録曲の出典と年号に誤謬多数)



- ・ルチアーノ・ベリオによる編曲：テノールと管弦楽のための八つのロマンツ
ァ 8 *Romanze per tenore e orchestra* (ヴェルディ 8 曲) 演奏：ホセ・カレ
ーラス (T) ルチアーノ・ベリオ指揮イギリス室内管弦楽団 Philips PHCP
432 889-2 所収

-
- 1 1824 年にナポリで出版が開始されたアマチュア向けの声楽・器楽曲集《音楽の気晴らし *Passatempi musicali*》がそれ。正式題名は《*Passatempi musicali o sia raccolta di Ariette e Duettini per camera inediti, Romanze francesi nuove, Canzoncine Napolitane e Siciliane, Variazioni pel canto, piccoli Divertimenti per Pianoforte, Contradanze, Walz, Balli diversi etc.* (音楽の気晴らし、または未出版の室内アリエッタと小二重唱、新たなフランスのロマンツァ、ナポリとシチーリアのカンツォンチーネ、歌の変奏曲、ピアノのための小喜遊曲、コントラダンス [コントラダンツァ]、ワルツ、種々の舞踏曲等々の選集)》。このシリーズは、1824 年 10 月にナポリの *Reale Litografia Militare* [ジラル社 *Girard*] によって最初の出版が行われ、不定期ながら継続的に 1865 年まで続いた。職業音楽家ではなく一般の音楽愛好家が演奏できるよう平易に作曲・編曲されている点に特色があり、家庭音楽や中産階級のサロンへの楽譜供給を目的とした。
 - 2 詳細は水谷彰良『七月王政期パリのサロンと近代歌曲の誕生』(日本ロシニーニ協会紀要『ロッシニアーナ』第 30 号、2008 年、23-35 頁) を参照されたい。